

首都高速道路構造物の大規模更新のあり方に関する調査研究第6回委員会 議事要旨

日時：平成24年11月19日（月）17:00～19:00

場所：イイノホール&カンファレンスセンター Room A1

出席：委員長 涌井 史郎（東京都市大学環境情報学部 教授）

委員

石田 東生（筑波大学大学院システム情報工学科 教授）

勢山 廣直（（独）日本高速道路保有・債務返済機構 理事長）

藤野 陽三（東京大学大学院工学系研究科 教授）

真下 英人（（独）土木研究所道路技術研究グループ グループ長）

三木 千壽（東京都市大学総合研究所 教授）

（秋池 玲子（ボストンコンサルティンググループ パートナー&マネージング・ディレクター）、前川 宏一（東京大学大学院工学系研究科 教授）は、所用のため欠席）

議事：

1. トンネル、半地下部への対応
2. その他

（主な意見）

- ・ 損傷件数の定義をはっきりした方が良い。
- ・ 経過年数 30 年以上のところでは損傷数が多くなっているが、これが経年劣化によるものなのか、最初からあったものなのかを明確にする必要がある。
- ・ 半地下部の検討結果について、維持管理上だけでなく、走行性も非常に悪いので追記すべき。
- ・ 悪さと年数は比例しない。急いで施工したもの等、値段とクオリティの関係がある。エンジニアから見れば、悪いものについては、それなりに理由がある。年数だけで評価をすることについて、考察としてもう少し吟味した上で、表現を考えるべき。
- ・ 「構造的に問題となる損傷の事例」について、首都高にそのような例があるように見える。「一般例」としないと誤解を招くため、わかりやすく表現すべき。
- ・ 一番重要なことは、損傷が進行するのかもしれないのかということである。何故大丈夫であるかの理由をきちんと説明するが必要。この議論は、バックキャスト的な議論であり、償還が終

わった 100 年後でも、健全であることを前提に議論しているのであることから、それでも大丈夫であるという理由を書くべきだと思う。

- ・健全であることは、非常に良いこと。データを再整理し、もう一言付け加えられれば、良い資料になる。

以 上